

福島広報

発行 福島地区小学校長会
責任者 会長 丹治 秀 樹
編集 同 広 報 部



【巻 頭 言】

校長として成すべきこと

福島市立福島第四小学校長 丹治 秀樹

「これより、元〇〇小学校長、□□□□様の叙勲伝達式を行います。」

「はじめに、勲記、勲章の伝達を行います。」

「次に、教育長が挨拶を申し上げます。」

教育長さんが、功績調書の一部を読み上げる。

「□□□□様より、ご挨拶をいただきます。」

「最後に、出席者を紹介いたします。」

福島市教育委員会学校教育課主任指導主事の業務に、「叙位・叙勲」がある。私は、平成28年度にそれを担当した。冒頭の場面は、校長としての功労を称えて叙勲された受章者への伝達式の様子である。元校長が米寿の折に行われる高齢者叙勲と呼ばれている。ほかに叙勲には、大々的に報道される春秋叙勲と、有資格者が死亡されたときの死亡叙位・叙勲がある。叙位とは、位階を授けられることである。

担当者になると、市内在住で米寿を迎えられる退職校長の誕生日の数か月前に功績調書を作成する。また、年齢を問わず退職校長の訃報があれば、1週間以内に調書を作成して県教委に提出しなければならない。この功績調書作成のために必要になるのが、退職時に校長自身が記載する基礎資料である。この資料を参考に、教諭時代、教頭時代、校長時代、特に力を入れて取り組んだ事柄などを時系列でまとめて功績調書を完成させる。特に、校長としての信条や功績を明確に述べなければならない。働き方改革からか、現在はA4版1ページになったということだが、当時は合計で4ページ程の分量があった。

この基礎資料が市教委になく、退職校長会にも保管されていない場合、担当者は急に忙しくなる。履歴書から勤務校を調べ、現校長に電話連絡し、勤務当時の様子が分かる資料をFAX等で送ってほしいと依頼したことがあった。沿革史や学校要覧などである。その資料から当時の校長の功績を読み解き、文章化する作業を短時間で行わなければならない。

伝達式は、一年間に5、6回ほど行われた。お一人の伝達時間はわずか10分ほどであるが、伝達式の中で受章されたご本人から感謝の言葉をいただいたり、時には、功績調書を聞かれたご遺族が、「亡き父親の学校での様子をお聞きし、胸がいっぱいです。本当にありがとうございました。」と涙を流されたりすることもあり、この業務に携われたことの喜びを実感することも多かった。

基礎資料がなかった際の苦労があったため、その年度末に退職される先輩校長の皆様に、これまでの教員人生を振り返りながらぜひ基礎資料を作成していただくよう依頼文を送付した。未来の後輩担当者のためでもある。現在も叙位・叙勲の担当者は、同様の依頼をしているようである。

さて、定年退職の年となった。叙勲に値するような功績がないことは重々承知であるが、自分が担当者であったから、依頼があれば基礎資料だけは作成しようと思う。基礎資料には教諭時代からの足跡を記載するが、重要なのは当然のことながら校長時代である。校長として何を成したかを振り返った時、自分に何が書けるのか。自問自答していた5月下旬、3年ぶりに対面で行われた全連小総会・研修会に初参加するため、久しぶりに上京した。

開会式。大字弘一郎全連小会長は、挨拶の中で、「～我々校長が見るべきものは、目の前の子どもたちと教職員であり、子どもたちの未来と学校の未来の姿です。自ら未来を拓き、明るい未来社会をつくっていくのは、目の前の子どもたちです。そして、この子どもたちに確かな力をつけていくのが、我々の仕事です。なんと夢のある仕事でしょうか。令和の日本型学校教育を創造し、実現させるのは私たちです。～」

と、力強くその気概を述べた。同感である。

教職員とともに、目の前の子どもたちに確かな力をつけていく学校経営をしなければならない。それが校長として成すべきことである。残りの月日、そのことに全力を尽くしたいと思うのである。

防災教育を通して

福島市立佐倉小学校長 黒羽 慎一

本校の北側約600m先には、日本一きれいな荒川が流れています。吾妻山の火山が噴火した際の融雪による氾濫は、ハザードマップによると最大で3m～5mと予想されています。

そのような環境のもと、令和4年度福島市防災教育モデル事業として、市と連携して防災教育に関する行事を積極的に取り入れることになりました。主な取組を以下に示します。

1 防災運動会の実施

5月に行われる運動会に「災害脱出救済リレー(下学年)」と「救援物資ジェスチャーリレー(上学年)」を実施し、災害が生じたときの対応力を身に付けるひとつの方法として実施します。

2 河川洪水による避難訓練

同様に、5月に幼稚園と合同で荒川の洪水を想定した避難訓練を実施します。本校の二階に幼稚園児と児童が避難します。その後、洪水の危険が遠のき保護者へメール配信を行い、幼児と児童を体育館で引き渡すまでを行います。また、消防署員から洪水発生時の避難の仕方や非常食について幼稚園児と児童対象に講話をいただきます。

その後、幼稚園教諭と本校教諭が非常食の試食を通して、各家庭での避難グッズや非常食の準備の必要性等について講話をいただきます。

3 AEDの使用法と心肺蘇生法の実技訓練

7月に6年生と保護者を対象に、AEDの使い方と心肺蘇生法の実技講習会を開催します。AEDの機器の説明と特徴を知った上で、心肺蘇生と併用して人の命を救う一連の動作を実践に即して行います。

この3つの取組を通して、子どもと保護者、教職員を対象に防災意識を高め、いざという時の実践力を養っていきたいと考えています。このたび、防災関連の事業を行政とともに考え、実際に取り組めたことを今後の防災教育に役立てていきたいと思います。

校長の存在感…

福島市立金谷川小学校長 宍戸 与一

校長職3年目になりました。この2年間、責任の重さに押しつぶされそうになりながら無我夢中でした。いまだに右往左往の毎日です。それまでは自然体で話せていたのが、校長になった途端、柄にもなく緊張している自分がいたり、何があるわけでもないのに、日々漠然とした不安が頭の片隅から離れなかったり。これも校長という重責を担う者のプレッシャーなののでしょうか。

周りの校長先生方を見ていると、堂々としていて自信があり、力強く振舞っているように見えます。強いリーダーシップを求められる校長職ですが、私のような弱いリーダーでも、強いフォロワーによって強いチームはできるのではないかと思えるようになってきました。先生方が、主体的に学校経営に関わり、働きがいのある学校にできるのではないかと。そのために心がけていることは、「任せる」と「信頼」です。先生方が、やらされ感を抱かないようにすることが肝要だと思っています。仕事への自覚をもち、任された仕事に対して自ら意思決定ができるようにする。自分でやると自信がつくし、何より楽しいものです。先生方のワクワク感が大切にされ、結果よりもプロセスを大切に感じる感覚を共有したいものです。

校長として、いつでも元気で機嫌よく過ごしている、そして忙しそうにしないことも大切だと思っています。いつでも先生方が校長に話しやすい状況を作っておくことが、先生方に対するケアになります。先生方が、しっかり子どもに向き合えるように環境を整え、負担を減らすことが、校長の大切な仕事だと。

校長の存在感が消えていても、先生方も子どももみんな笑顔あふれる学校をめざして取り組んでいる。そんな姿を見ることも、私の校長としての喜びです。

私もいよいよファイナルステージ、ラストスパート!!



心と授業と南向台

福島市立南向台小学校長
栗城 敏彦

この春から新会員としてご指導をいただいております。たいへんお世話になっております。

小高い丘（標高176m余り）の上、閑静な住宅街に囲まれた本校は、平成9年度に開校し本年度創立26周年を迎えています。卒業生数は昨年度1,100名を超えました。今年度の全校児童数は104名（5月1日現在）です。素直で明るい子どもたちと心温かく丁寧に対応する教職員、子どもたちのために協力してくださる保護者や地域の皆様とともに学校が動いていることに、校長としての職責の重さを感じています。

本校は『思いやりの心の育成』のため、全教職員で心の居場所となる学級・学校づくりにあたっています。居心地よく毎日を過ごすことにより、よりよく社会と関わり、よりよい人生をおくる力を子どもは身に付けています。

ある児童が「去年、割り算ができなくてテスト点数もよくなかったんです。でも、今年は数直線がわかるし授業が楽しいです。」と話していました。授業を参観すると「めあて」と「まとめ」が毎時間あります。学習内容がわかり授業が楽しいと、子どもは授業を待ち遠しく思い登校が楽しみになります。「確かな学力の育成」のためにも全教職員でこのことを共有しています。

安全パトロール隊や青少年健全育成推進会、地区体育協会、読み聞かせボランティア、峯山太鼓保存会など学校と地域の連携・協働の基盤ができている強みを生かし、教育目標『高い理想をめざしチャレンジする、心豊かで「輝くひとみ」の子どもの育成』のための教育活動を継続しているところです。保護者・地域の皆様のご支援に感謝しながら、南向台小学校区の宝である子どもたちの健やかな成長に向けて、全力で取り組んでまいります。ご指導どうぞよろしく願いいたします。



“ちむどんどん” する日々

福島市立平田小学校長
佐藤 裕子

瞬く間に小学校勤務の2か月が過ぎようとしています。毎日が新鮮で、まさに“ちむどんどん”。教員として初めての「運動会」「鼓笛パレード」…子どもたちのひたむきで真っ直ぐな眼差しに感動をもらいました。日々の教育活動においても、生活科、外国語活動等における学びはもちろん、小学校ならではの教育活動に眼から鱗。そして何より、複式学級による授業の見つめ直し。先生方は本当に丁寧に子どもの学びに寄り添った授業を行っていて、発見の連続です。

特に、「体験活動の充実ぶり」には目を見張るものがあります。地域の方のお力をお借りして実施する『平田んぼ』『野菜づくり』等、為すことによって学ぶことの尊さを実感しているところです。地域の方々のバックアップ体制は本当に素晴らしく、“チーム平田”の歴史を感じます。授業参観の出席率100%には驚きました。

「校長先生にこれあげる！」とよつ葉のクローバーや紙飛行機を差し出してくれる1年生、はにかみながら「この掲示は校長先生が書いたのですか」と尋ねる6年生。校庭いっばいに駆け回る子どもたちの笑顔をカメラのファインダー越しに追いかけていると、「この子どもたちのために自分にできることを懸命にやりたい」との気持ちが膨らみます。子どもたちの元気に励まされ、小鳥のさえずりに心が癒され、誠実な教職員や地域の方々に支えられるという環境に感謝し、邁進したいと思います。

NHK朝ドラ『ちむどんどん』に負けない平田小のドラマに日々立ち会える幸せを実感しつつ、『ちむどんどん』の主人公暢子のように、子どもたちが夢やなりたい自分を見つけることができるよう励んでまいります。福島地区校長会の皆様、ご指導どうぞよろしく願いいたします。

※NHK朝ドラ『ちむどんどん』は、沖縄の言葉で「ドキドキする」の意。



何事も事実確認から

福島市立蓬萊小学校長
石井 隆博

保護者や地域の方から相談や苦情が寄せられたとき、早計に結論を出すことなく、まずは当事者や周りの人たちから事情を聴き取るなどして、事実の確認を十分に行うことが重要です。そのことは、管理職のみならず全ての教職員が周知のことです。

私が校長を拝命いただいた蓬萊小学校は、市内だけにとどまらず域外の先生方からも、「生徒指導困難校」として名を馳せており、私自身赴任する以前は不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、いざ本校に着任してみると、子どもたちは元気いっぱい、たいへん素直で純真です。教職員もやる気に満ち溢れており、子どもたちや保護者とも意思の疎通がしっかりできています。PTA活動も盛んで、地域の諸団体の活動も活発です。地域を挙げて学校全体で頑張っていくという気概が感じられました。確かに、学区内には児童養護施設や古い住宅があります。昔は生徒指導がたいへんだったことは事実です。しかし、時代とともに今は昔のことであり、それらから通う子どもたちも伸び伸びと学校生活を送っています。

私たちは思い込みや偏った情報に左右されることしばしばあります。自分は大丈夫、そんなことはないと思っていても、いつの間にか誤ったとらえ方をしているかもしれません。インターネットが普及し、誰でも簡単に最新の情報が入手できるようになりました。情報化社会と言われて久しいですが、その情報が正しいか否かは自分自身で見極めなくてはなりません。誤った情報からは誤った見方、考え方が生まれてしまいます。蓬萊小学校の子どもたちのために、校長としての責務を果たせるよう、「何事も事実確認」を怠らないようにしたいと思います。正しく舵取りできるよう、ご指導よろしく願いいたします。



チーム学校で

福島市立立子山小学校長
赤間 聡

「おはようございます。今日もよろしくお祈りします。」という子どもたちの元気な声。「こちらこそよろしくお祈りします。」という思いをこめてあいさつを返し、学校の日が始まります。

校長として赴任して、2か月が過ぎようとしています。4月の職員会議では、「チーム立子山として進んでいきたい」という自分の思いは伝えたものの、早速それぞれの分担を果たすべく、職務に熱心に取り組む職員、毎日の学習活動にしっかり臨む子どもたちの姿を見ながら、自分がすべきことを考えつつ、なんとなく落ちつかず、焦る気持ちを抱えながらの日々を過ごしてきたというのが正直なところです。

だからこそ、校内での子どもたちの様子を観察し、活動中でのよい姿やがんばっている姿を認めてそのことを伝えたり、職員の労をねぎらったりすることを、機会をとらえて行っていくことにしています。そして、子どもたちの姿から、私たちチーム立子山の取組を検討、改善していきたいと考えています。それが、登校してくる子どもたちのために私たちがすべきことだからです。

「学校のために、みんなでやっぴいこう。」と仰ってくださる地域の方々も大きな支えです。プール清掃などの作業や、各種行事、地域と連携しての取組では、大きな力となっていただいています。多くの方々の力をいただきながら、日々の学校運営をさせていただいていることに心から感謝しています。

授業が終わると、「明日も元気に学校へ来ます。さようなら。」という子どもたちの元気な声。「明日も楽しいいい一日になるように、チーム立子山でがんばるからね。」という思いをこめてあいさつを返し、今日も子どもたちを見送ります。皆様のご指導をどうぞよろしくお願いいたします。



ひとりひとりが さくように

福島市立飯野小学校長
佐藤 育男

校地北側に広がる法面には紫陽花が一面に植えられています。平成7年度本校開校の際に、地域の方々が協力して植えたものです。このところの雨で、すっかりと緑色を増した葉が大きくなり、小さなつぼみがかところどころに見られるようになりました。色とりどりの花を咲かせてくれるのがとても楽しみです。紫陽花が所狭しと咲く様は本校の自慢の一つです。おそらく地域の多くの方々がこの紫陽花の花を見るたびに、当時のことを思い起こして、今でも本校に思いを寄せていただいていることと思います。

早いもので一学期が折り返し地点を過ぎました。新任校長として、本校職員をはじめ、多くの校長先生方に助けていただきながら、あっという間に過ぎた2ヶ月でありました。本校勤務2回目の私が一番の心の支えにしているのは、かつて本校でお仕えした3人の校長先生のお姿です。時折、校長室にある当時のアルバムを見ながら、校長先生方がどのような信念で学校経営をなさっていたのだろうと思いを馳せ職責に向き合っています。

校歌「翼そろえて はるかな未来へ」の中に、「さくようにさくように ひとりひとりがさくように♪」という歌詞があります。一人一人のつぼみ(個性)がそれぞれの色で咲き開き、飯野町そして福島市を明るく照らし、地域の皆様の希望の星となる。やがてはそれぞれの翼で未来を切り開いていく。これまで私がお仕えした校長先生方も思い描いたであろうそのような子どもたちを育てていくため、校長として職員力を集結し、一丸となって教育活動に取り組んでいきます。

今後も地区校長会の諸先輩方のご指導をいただきながら、職責を果たせるように努めてまいります。どうぞよろしく願いいたします。



ときめく時間を 子どもたちに

福島市立中野小学校長
佐藤 友子

NHKの人気番組「チョコちゃんに叱られる」で「大人になるとあっという間に1年が過ぎるのはなぜ?」という質問がありました。回答者は正解を言えず、チョコちゃんにいつもの言葉で叱られていました。答えは、「人生にトキメキがなくなったから」だそうです。つまり子どもは目の前で起きることに発見や疑問、驚きなどの様々な感情を抱き、ときめいているから時間を長く感じるのに対して、大人は毎日が同じことの繰り返しに思えてときめかず、時間を早く感じるのだそうです。自分自身、時間が早く過ぎるようになったと感じるのは、トキメキが少なくなっているためかと少し寂しい気がしました。考えてみると、一年が長く感じられていたであろう幼稚園に入る前から本を読むのが大好きでした。母親がレコード付物語シリーズをそろえてくれ、仕事の手が空くと本を読んでくれました。本の中の主人公に自分を重ねたり、その土地に行ったつもりになったりと、想像を膨らませるのが楽しい時間でした。このようなときめく経験が、教師という職業を選ぶきっかけになったように感じています。

本年度、新任校長として、日本三不動の一つに数えられる中野不動尊に護られ149周年を迎える本校に着任しました。4月下旬に実施した「春を感じよう」では、桃や林檎の花が満開の中、全校生で中野不動尊まで歩き、境内の緋毛氈の上でお茶を立てていただく子どもたちのトキメク笑顔を見て、幸せと感謝の気持ちで一杯となりました。地域との結びつきの大変深い本校ですが、今年度をもって149年の歴史に幕を降ろすこととなります。伝統の重さを感じながら、有終の美を飾るべく、「子どもにとって」の視点を最優先に誠心誠意努めて参りたいと思います。ご指導よろしく願いいたします。

ピンチをチャンスに

福島市立御山小学校長 菅藤 文彦

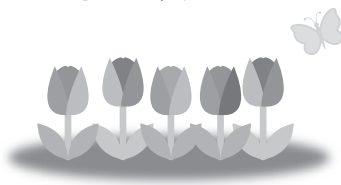
「みんなで大きな声で歌いましょう。」「グループで話し合しましょう。」

学校にはいろいろな当たり前があります。朝から学校に来るのが当たり前、自分の机で静かに授業を受けるのが当たり前、学校に来て友達がそばにいるのが当たり前、友達と楽しく話せるのが当たり前…。これらのことは、学校ではすべてごく自然のことでした。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により、当たり前のことが当たり前でなくなりました。これまで特に何を考えることもなくしていたことが当たり前にできなくなりました。当たり前ということがいかにありがたいかを実感させられました。

東日本大震災直後、当たり前のことが当たり前でなくなった時、皆、途方に暮れました。でも、人間ってすごいなあと思いました。困難を解決していききました。道路や線路が消えても元に戻すし、もっといいものを作りだしました。

コロナ禍の中、今までごく普通に実施していた運動会はこれまで同様にはできなくなりました。昨年、本校では、『三密』をできる限り避けたプログラムの工夫、身体的距離の確保などに努めながら実施しました。観戦場所の学年ごとの入れ替えなども行いました。家族の拍手による温かい応援を受けて、子どもたちは力を出し切ることができました。

当たり前のことが当たり前でなくなった時、どう考えるのか。これが大事だと思います。当たり前にできたことが当たり前にできなくなった時こそ、考え方を変えれば今まで思いもつかなかったことを思いつく良い機会かもしれません。『ピンチをチャンスに』前向きさを失わず、みんなで力を合わせて頑張っていきたいと思います。



広報部だより

福島地区広報部長 福島市立庭坂小学校長 吉田 牧子

福島地区広報部は、会員相互の理解と連携を深め、地区小学校長会活動を活発に推進することを目的として、以下の編集方針のもと、年4回「広報福島」を発行する予定です。

- 1 校長職の機能の向上及び地区校長会の活動に寄与する内容を目指す。
- 2 課題性、適宜性、必要性、話題性に富んだ魅力ある広報誌を編集する。
- 3 全会員執筆を原則に、親しみと活力のある広報誌を編集する。

以上の編集方針を踏まえ、広報誌の内容は、「巻頭言」「学校経営の一端」「提言（特別寄稿）」「特集」「新会員紹介」「趣味・随想」「各部だより」とし、学校経営に資する内容を基本として会員の皆様に原稿の執筆をお願いしております。

今年度より「特集」のテーマを県小学校長会広報部の特集テーマを受け、「子どもを育てる学校経営と校長の在り方」と設定しました。各学校の取組を紹介する「学校経営の一端」とは異なる視点での会員の皆様の経験や識見について知ることのできる貴重な機会になると期待しています。また、今年度の「提言」は、福島市教育委員会教育長の特別寄稿を、9月発行の第2号に掲載予定です。

さて、原則全会員執筆を方針として発行してきた本誌ですが、実は学校減少に伴う会員の減少で発行について見直す時期にきていると感じています。発行の目的を守りながら、会員及び校長会に寄与する広報誌の在り方を検討していきたいと考えています。

会員の皆様、今年もどうぞよろしくお願ひいたします。

編集後記

掲載した原稿を拝読し、校長としての我が身を振り返る機会となりました。そして高村光太郎の「道程」の一節が思い出されました。お忙しい中、玉稿をお寄せくださった会員の皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

福島市立庭坂小学校長 吉田 牧子